

『マルコによる福音書』の中のイエス

Jesus in the *Gospel According to MARK*

高橋 宏

- (1) イエスは何をしようとしたのか。
- (2) イエスはなぜ十字架刑を受けたのか。
- (3) イエスは「メシア (救世主)」であったのか。
- (4) イエスは「神の子」であったのか。
- (5) イエスはどのような「人間」であったのか。

イエスという人物に関して、以上のような問いかけをしてみたい。この人物は『聖書』の中にしか立ち現れない、と言ってもよいくらいであるが、この書物は、言うまでもなく、歴史書ではなく信仰の書であるので、史実を求めるには十分な資料とは言えない。そのため、我々に出来ることは、脚本を手にする演出家のように、『聖書』の中から生身の人間像を、独自の想像力を駆使して、立ち上がらせることであろう。万人に対して説得力を持つような完璧なイエス像を構築することは、多分、不可能な夢であろう。一人一人の独自のイエス像を想定してみることで、多分、満足しなければならないのではなからうか。生身の「人間」としてのイエス像を可能な限り描いてみたい、というのが筆者の願望であり、信仰の対象としてのイエス像の前にひざまずくのではないのである。筆者のイエスに対する立場を明確にしておきたい。第一に、キリスト教徒の立場は取らない。筆者は、クリスチャンではない。第二に、『聖書』の中には虚構部分がかかり混入している、と考える。慎重に虚実のふるい分けをしてみたい。独善的に処理しなければならない場合が多々あるが、そのことについて遠慮はしない。筆者のイエス像が描ければいいのである。第三に、合理主義の立場を取る。奇跡的現象は、イエスの復活も含めて、言い伝えとしては受け取るが、事実として受容することは出来ない。第四に、イエスは「キリスト教」という新しい宗教の創設には無関係で、ただ自分の所属していた「ユダヤ教」教団の全面的改革に突き進んで失敗した、と考える。イエスの出現によって、「ユダヤ教」が少しでも変化したということはないのである。「キリスト教」は、パウロのエネルギーが創り出した新興宗教であった。第五に、『聖書』の中の四つの福音書の中で、『マルコによる福音書』に全面的に依拠する。これがイエス及びその周辺の人々の最初の行動記録であり、記録者の生々しい息づかいが感じられ、まだ十分に咀嚼されていない点が却って説得力を持つからである。しかし、同時に、他の福音書を無視する訳ではなく、折に触れ参照させてもらうこととする。イエスの教説の詳細はむしろ他の福音書の方に明示されている、と言わざるを得ない場合があるのである。

イエスの足跡と言動

イエスの歩いた跡は、正確に確定は出来ないにせよ、おおよそのところは分かる。出身は、「ガリラヤのナザレ」である。これに異議を唱えるつもりは毛頭ない。『マルコによる福音書』（以後『マルコ』とのみ記す）には、ベツレヘムのことは全然言及されていないのである。ベツレヘムという地名が、イエスとの関連で出て来るのは、イエスをダビデ王家の血筋の中に位置づけたいという伝承創作欲のなせる業であろう。ダビデはベツレヘムの生まれであった。イエスの出自については、『マルコ』6；3で知れる。それによると、イエスは、ナザレの大工であり、母はマリヤといい、兄弟には、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンがいて、他にも姉妹がいると言う。これを疑う理由はない。

次に、ヨルダン川で洗礼者ヨハネの洗礼を受けた（『マルコ』1；9。以下この福音書からの引用は章と節のみ）と言う。場所については、明確に指定はされていない。ヨハネの洗礼を受けるために、ユダヤの全地方とエルサレムの全住民とが、彼のもとに集まり罪の告白をした（1；5）とあるから、多分、ユダヤ地方に接するヨルダン川、つまり、死海に近い辺りではないか、と思われる。ガリラヤ地方からはかなり南の方までイエスは歩いて来たことになる。ヨハネが投獄された後、イエスは、ガリラヤにやって来た（1；14）と言うから、これは、南の方ユダヤ地方から北上して来た、ということではないか。さて、この洗礼をイエスは一度は受けたかもしれないが、その後この儀礼に対して全然関心を示さず、自身では一切この儀礼を弟子や一般大衆に対して施そうとはしていないところを見ると、これに対しては批判的であったのではなからうか。イエスは、単なる形式的儀礼儀式は認めず排除するというかなり過激な方針を取ろうとすることで、かなり早くから保守的ユダヤ教指導者層と軋轢を起し始めているのである。

荒野に40日間野獣とともにいた（1；12）というのは、ガリラヤへ行く途中の修行のことであろう。多分、ヨルダン川に沿って40日間かけて北上して行ったのであろう。

ガリラヤ湖のほとりで、神の福音を宣教し始め、早速4名の弟子を得る。いずれも漁師であった。本当にイエスの教えを十分理解した上での弟子入りかどうかは、いささか疑問である。あまりにあっけない弟子入りであり、その後の彼らの言動には師匠を失望させるようなものがなかった訳ではないのである。

ガリラヤ湖の北岸のカファルナウムへ入る。ここでは、イエスのユダヤ教的しきたりへの最初の挑戦が始まる。安息日に会堂で人々に教えるのは、戒律破りを意図した過激行動である。好奇心で集まって来た人々は、まずその事に驚き、更には、「権威ある口調で（1；22）」つまり、平たく言うと、「偉そうに」お説教をするイエスにびっくり仰天したのである。そして、聴衆の中には、ばかにして反抗的姿勢を露わにする者も出て来る。こんな調子であろう。「ナザレのイエスよ、お前さんは一体全体おれたちとどういった関係があるってんだね。お前さんは、おれたちをつぶしにかかろうってのかい。おれはお前さんが何者であるか、知ってるぜ。神様がお遣わし遊ばした聖なるお方って訳さね。（へっ、聞いてあきれらあ。）（1；24）」イエスも負けてはいない。「黙れ」と一喝。彼の言いたいことは、多分、「そんな事をほざくのはお前の体の中に汚れた霊がいるせいだ。馬鹿者め。悪霊め、出て行け。」この厳しい一喝が、イエスの得意技である。この男もしゅんとして沈黙してしまう。聴衆は、肝をつぶして、お互いに顔見合わせながら、この新しい怖い説教師の出現を語り合うのであった。この噂はすぐに尾鰭が

ついてガリラヤ地方一帯に広まって行った。「汚れた霊を追い出すすごいラビがいるぜ」と。イエスの意図は、心を清らかにし素直に自分の話を聞いて悔い改め、近く来る神の国への準備をしなさい、と言いたいところにあるのであろう。「悪霊どもに語ることを許さなかった(1; 34)」と言うのは、からかい半分でとか遊び半分で来ている不埒な連中に対するイエスの厳しい姿勢を伝えているのである。

この後すぐ会堂から、弟子のシモン兄弟の家に行く。そこで、兄弟の姑が熱病で寝込んでいる所へ行き、イエスが「手を取って彼女を起こした(1; 31)」所までは事実として受け入れられるが、その後の、「すると彼女から熱が去り、彼女は彼らに仕え始めた(1; 31)」というのは、これがイエスの最初の、いわゆる「癒し」であるだけに、果たしてそれほど簡単に「治癒」が出来るものか、と疑問を投げかけておきたい。夕方になって、町全体が弟子の家の戸口に集まったと言う。そこでイエスは、更に「癒し」と「悪霊祓い」とを行ったようであるが、信用は出来ない。「悪霊どもに語るを許さなかった(1; 34)」という厳しさだけが信用出来る気がする。この後、イエスはまことに印象的な行動に出る。翌朝、イエスはまだ暗いうちから起きあがって、寂しい場所へ一人で行き祈るのであった。一番弟子のシモンたちが気がついて追って来て、「皆があなたを探している」と言うと、イエスは、「別の村や町へ行こう。私は、宣教のためにこそ来ているのだ(1; 38)」と言うのである。これは、まことに重要な宣言である。はっきり言うと、イエスは「宣教」がしたいのであって、「癒し」や「悪霊祓い」などがしたいのではないのである。また、そんなことは不可能な業なのである。既にしてイエスの意図と一般大衆の願望との間には、明確な乖離が生じ始めているのである。

そのようなイエスの希望で、ガリラヤ全土の他の会堂を訪れる(1; 39)のであるが、「癒し」に対するイエスの姿勢が察せられる場面が出て来る。らい病患者が来て、「私をきれいにしてください」とイエスに願い出ると、イエスは、「穏やかではあるが、怒りを露わにして(1; 41)」彼に触り「きれいになれ」と言うのである。そして、厳しい警告でもって彼を立ち去らせるのである。「(私が癒しを施すなどと)誰にも言わないで下さい。(癒しを求めるのなら)祭司の所へ行き、モーセがお出しになったお供物をお出しなさい。治りますよ(1; 43-44)」と指示する。ここで、注意されることは、イエスが怒りを発していることと厳しい警告を発していることである。これは、「分からないのかね。私は、心の問題のことを語りたいのだ。肉体の問題は祭司に祈ってもらいなさい」とイエスは言いたいのではないのだろうか。ところが、このらい病患者はイエスの言いつけを守らずに、イエスが触ってくれた、とおおっぴらに言いふらしたのである。ここで、まことに印象的な記述が出て来る。このため、「イエスは、どこの町にも入れなくなり、人のいない所に留まっていた(1; 45)」と言う。これは、らい病患者に触れたことで、イエスが忌避されたことを表している。そして、また、これはイエスが、人々に見捨てられた最下層の人々にも文字通り手を差し伸べることを躊躇しないことを表している。しかし、それでも至る所から人々がイエスの所へ押し掛け始めた、と言う。

再びカファルナウムへ入る。ここでも、イエスの意図と雑多な人々の思惑との食い違いが感じられる。4人の者に担がれて中風患者が運ばれて来たが、群衆のため入口から入れないので、屋根を剥いで穴をあけ担架のまま患者をイエスの所へ降ろしたと言う。さすがのイエスもこの熱心さには感心して、「あなたの罪は赦される(2; 5)」と言う。ここまでは、イエスらしくて頷ける。だが、この直後の、一座の中にいた律法学者の心の中を忖度してのイエスの発言は、過剰反応のように聞こえて、すんなり受け入れられない。中風の人に「立ちなさい。ベッドを

担いで帰りなさい」と言う、その患者は言われた通り、すぐにベッドを担いで皆の前から出て行ったと言う。しかも、このイエスの指示は、イエスがこの世で人の罪を赦す権利を持ち得る、ということを経法学者たちに納得させるために発するのだ、と言う。イエスは、本当に、「癒し」に成功したのだろうか、いや、それ以前に、「癒し」という治療行為を、本当に、イエスはやろうとするだろうか。彼の狙いは、精神的「癒し」であろう。心からの「慰め」と「励まし」とせめて手を差し伸べての「抱きしめ」と、そして、「神の意志の伝達」であろう。さて、ここで重要な自己規定をイエスはしている。すなわち、「人の子」(“the Son of Man”)と自分のことを呼び始めるのである(2; 10)。これは、「神の子」(“the Son of God”)ではない、というイエスの秘かなる「自己宣言」ではないのか。

再びガリラヤ湖に沿って宣教の旅を続ける。多くの人々が、ガリラヤからばかりでなく、ユダヤ、エルサレム、イドゥマヤ、ヨルダンの彼方、北は地中海沿岸のフェニキアのテュロスとシドンからも来たと言う。殆どパレスチナ全域から来たということである。この旅では、次の3点についての論争がイエスとファリサイ派の律法学者たちとの間で展開される。第一に、徴税人や罪人たちと一座することの是非。第二に、断食の是非。第三に、安息日を守ることの是非。以上の3点について、イエスは従来ユダヤ教の規定する戒律と慣習とを明確に否定する立場を取る。この立場は、「新しい葡萄酒を古い革袋に入れない(2; 22)」という名言で宣告されるのである。イエスは、合理主義者である。そして、既にして、この戒律破りのイエスに対して、ファリサイ派とヘロデ党とが、イエスを亡き者にしようとする陰謀がなされ始めたのである。イエスは、群衆に押しつぶされないように弟子たちに一艘の舟を用意させるが、これは、危険が迫った場合のことを考えてのことでもあったろう。また、イエスは、「あなたこそ神の子だ(3; 11)」と叫ぶ人々には、そんな風には呼ばないでくれ、と要請するのである。マルコは、そのように呼ばれる人々のことを「穢れた霊ども」と規定している。殺到する群衆は、大方、「癒し」を求めてイエスに触れようとするか、「神の子」としてのイエスを拝もうとするか、であって、イエスの心からは遠いと言わねばならない。

山へ登り、12人の弟子を任命する。シモンにペトロという渾名をつける。イエスの身内の者たちが会いに来るが、会おうとしない。神の意志を行う人々でないからである。しかし、ひとつの疑問は、イエスは十戒の中の第五番目の「父母を敬え」を否定はしていないのに、どうして母の心配を和らげるために会って話くらいはして上げなかったのか、ということである。ひとつの矛盾として指摘しておきたい。イエスは、様々の譬えにより「神の言葉」をより多くの心ある人々に伝えようとする。そして、「神の言葉」を理解しようとしていない人々は、母でも兄弟でも、縁なき衆生ということで相手にはしない、という厳しさをイエスは持つのである。

ガリラヤ湖の東岸のゲラサ地方へ渡る。嵐鎮めと悪霊が二千頭の豚の中に入ったという話。お話として聞いておこう。

再び西岸に戻る。長血を患う女がイエスの衣に触って直ちに治ったと言う。話として聞いておこう。ここではむしろ、イエスが「私に触ったのは誰だ」と咎めるような口調で詰問したことが面白い。イエスは、かなり気短かな男であったようだ。亡くなった12才の少女を蘇生させたと言う。話として聞いておこう。

故郷の町、ガリラヤのナザレへ来る。ここでは、まるで相手にされないままで、別の村々へまわることになる。村人たちは、おれたちと同じ大工が一体何を偉そうなことを言うのか、という姿勢である。宜なるべし。12人の弟子を二人ずつ組にして各地方へ派遣する。ヘロデ王が

イエスのことを聞き、殺したヨハネの蘇りだと言う。弟子たちの帰還があり、舟で移動するが、到着地点には群衆が先回りして待っていたと言う。五千人にパンを与える。これもお話としてしか聞くことは出来ない。

ガリラヤ湖の北端のベトサイダへ弟子たちを渡らせる。後からイエスは湖上歩行で追いつくと言うが、これもお話か弟子たちの見た夢か幻。

更に、西岸を少しばかり南下し、ゲネサレトに着く。ここでも至る所から病人が担ぎ込まれ、イエスの衣に触らせてくれ、と願うのであった。「癒し」を求める人々ばかりであった。彼に触った者はことごとく救われた(6;56)、と言う。はたして「治癒」したということであるうか。イエスは、食前に手を洗う習慣についてファリサイ派たちと言い争いしている。イエスは、必ずしも洗わなくてもよい、という考えである。外から人の中に入るものが穢れを作るのではなくて、人の中から出て来るものが穢すのである、というのである。イエスは、意外にも、不精者である。

地中海沿岸のフェニキアのテュロスとシドンへと北上する。

それから、また南下して、ガリラヤ湖を越え、その東南岸のデカポリス地方へ入る。ここでも聾啞者が来て、手を置いてくれ、と願うのである。この時、イエスはいささか奇妙な事をする。この男を群衆から引き離して一人にして、彼の耳と舌とに触れ、「開け」と声をかける。すると治癒した、と言うのである。そして、このことは誰にも言うなと口止めするのであるが、むしろ逆効果であった。疑問は二つ。一つは、なぜこの人を一人にしたのか。二つ目は、なぜ口止めしたのか。イエスは「癒し」が実は出来ない現場を多くの人々に見られたくないのであり、また、「癒し」の似非専門家として世に知られたくない、というのが筆者の推測である。イエスは、「神の国」が近いことについて人々に分かってもらいたいのであり、精神の入れ替えを期待しているのである。しかし、世の人々は、イエスを「癒し」と「悪霊祓い」の専門家と見て後を慕うのである。四千人に魚とパンとを供したと言う。お話として聞いておこう。

ダルマヌタ地方へ舟で渡る。この地名の場所は特定出来ないようである。多分、ガリラヤ湖の西岸のマグダラかと言われている。再び、ファリサイ派との論争である。彼らは「天からの徴」を示せと迫る。イエスはただ嘆息するのみ。彼にとっては、そんなものはどうでもいいものなのである。

再び北岸のベトサイダへ渡る。盲人が来る。イエスは、彼を村の外に連れ出し、治してやり、「村の誰にも言わないように」とまたもや口止めするのである。群衆のいない所で、イエスは盲人に噛み砕いてよくよく言い聞かせたのであろう、私に「癒し」など求めるものでない、と。

ガリラヤ湖のはるか北方のカイサリア・フィリッピへ行く。この時、イエスが弟子たちにいるいる聞くなかで、「お前たちはこの私を誰だと思うか」と問いかけるのに対して、ペトロが「メシア(救世主)です」と答えると、イエスは厳しい口調で、そんなことは誰にも言うでない、と命ずるのであった。なぜイエスは口止めしたのか。イエスは自分を「メシア」であるとは考えていない、とすんなり受けとめたい所であるが、どうもそう単純でもなさそうである。イエスとはそもそも何者なのか。これは、大変な問題である。独断的な言い方を許していただきたい。イエスは、「メシア」という役柄のとんでもない重大性を、勿論、認識していた。軽々に、その役柄を引き受ける、などと言えるものでもない。しかし、イエスのやろうとしている事をとことん押し進めると、遂には、社会的政治的大衆運動にまで連動せざるを得ないだろう、と言うことは、覚悟していたのではないか。そして、その流れの中で宣教を続けると、既に起こ

りつつあるように、保守派の抵抗との決定的な衝突にまで突き進まざるを得なくなる。「似非メシア」のレッテルを張られれば、それまでである。イエスは、しかし、それでも突き進む。イエスの心情は複雑である。イエスはユダヤ教の在り方を根本から改革しなければならない、という信念に燃えている。神の御意志に沿うような在り方に直さなければならない、という意志は梃子でも動かない。とすれば、彼の行く手には、「自己放棄」或いは「自己犠牲」或いは、言葉は悪いが、「自滅」しかない。ユダヤ教の組織がそうやすやすと変化するものではないことは、イエスも十分に承知しているのである。彼は、重大なる決意を固めつつある。自分の命を捨てることは、一粒の種を蒔くことである、と深く心に決する所がある。この決意を弟子たちに語り始める。最初の受難復活の予告である。ここでも、印象的なことが起こる。ペトロが師匠の腕を取り非難したのであるが、師匠は振り向き逆にペトロを「立ち去れ。サタンよ」と叱りつけたと言う（8；33）。神の御意志を通そうとすれば、自分は死ななければならない、この重大決意を理解しようとしないう一弟子を「悪魔」呼ばわりしたのである。イエスの姿勢の特徴がここにも如実に出ていると言える。第一に、イエスは、「メシア」になろうとは思わないが、「メシア」と殆ど同じ立場に立たざるを得ないことで、「似非メシア」として断罪されざるを得ないだろう、と覚悟していた。第二に、イエスは、自分の意図を理解しない人に対しては、「悪霊」とか「サタン」とかと決めつけることがよくある。イエスは、先にも述べたが、かなり気短かで痲癩を爆発させる場面がよく今までもあったのである。この短気が「悪霊被い」であるとして弟子たちによって美化されたのであろう、と想像していけないことはないのである。ペトロも、この時点で「悪霊」を被ってもらったのである。さて、そして、このイエスの重大決意に最後までついて行くほどの理解と覚悟とを持つ弟子は、いないのである。弟子たちは、イエスの言うように、「神の事を考えずに、人間の事を考えている（8；33）」のである。

この6日後に、山に3名の弟子だけを連れて行く。ここでイエスがエリヤとモーセと語ったと言う。雲の上から声がした、と言う。マルコのイエスへの御祝儀としての場面であろう。下山の時に、「エリヤ」のことで弟子たちが尋ねる。保守派は、イエスが本当のメシアであるならこの預言者が先に来てその事を告げる筈だ、と言っている、と弟子たちは言う。イエスの答えは、「エリヤは既に来てしまった。しかし、人々が好き勝手なことを彼に対してしてしまったので、人の子が苦しみを受けることになるのだ（9；12-13）。」つまり、イエス自身が世に出るべくきちんとした「預言」がなされていないので、イエスは誤解されざるを得なくて、そのため身を滅ぼさざるを得ないのだ、と言うのである。イエスにとっての「エリヤ」は、多分、ヨハネであったのだろう。ヨハネは既にヘロデ王によって首を斬られてしまっている。イエスの前途が明るいものである筈がない。

下山して下に残っていた弟子たちの所へ戻ると、弟子たちの「悪霊被い」が失敗したと言うので、イエスがてんかんの症状を呈する子供から「穢れた霊」を追い出したと言う。ここで、印象的なのは、弟子たちが「どうして私たちにはあの霊を追い出すことが出来なかったのでしょうか」と問うのに対して、イエスが「この種のものは、祈り以外には効き目はないのだ（9；29）」と答えているのである。しかし、この場面では、イエスは祈っている風もなく、ただいろいろ子供の父親の話を聞いてやり、群衆が迫って来るのを見ると、霊に対して「出て来い」とどなりつけているだけである。筆者の推測は、ここでもやはり「悪霊被いでの癒し」は成功せず、ただ神に祈りなさい、とだけ言い諭したのではないか、という所である。

ガリラヤへ入り、少し南下して又カファルナウムに着く。第二回の受難復活の予告がある。

弟子たちの中で、誰が一番偉いか、という事が議論され、イエスにたしなめられている。そんな俗っぽい問題ほどイエスの意図から遠いものはない。この地方では、イエスは誰にも知られないままに通過したいようである。

ずっと南下してユダヤ地方、更にはヨルダンの彼方（ヨルダン川の西岸地方）に足を延ばす。群衆が集まる。ここでもファリサイ派がしつこくつきまとう。離縁問答。この問題については、イエスは非常に厳しい姿勢を示す。離縁し再婚する者は、姦淫するのと同じだ、と言う。子供たちがイエスに触ってもらうために親たちに連れて来られる。弟子たちが近寄せまいとして親たちを叱りつけると、却って、イエスが憤慨して、「そのままにして置け」と命じ、子供たちを抱きかかえて祝福するのであった。ここでも、弟子たちは師匠の意図を十分に理解していなくて叱りつけられているのである。不肖の弟子と言わざるを得ない。金持ちが神の王国に入るより、らくだが針の穴を通り抜ける方が易しい、という述懐。財産に執着する心を捨てることが出来ないからである。そして、第三回目の受難復活の予告。イエスは先頭に立って、エルサレムをめざす。ヤコブとヨハネとが栄光の中でイエスの右と左に座りたいと言う。そんな事は、イエスの許すべき事ではない、と一蹴する。他の十人がこれを聞いて、二人に対して激しく憤慨する。二つの感想を持つ。一つは、弟子たちはイエスがエルサレムで栄光の座に着くだろうと予想していたのであろうか、という事。そうであれば、何と甘い見通しを弟子たちは持っていた事が、と感じざるを得ない。二つは、弟子たちの中で、まことに俗世間的なもめ事が起きている事に呆れざるを得ない、という事である。これは、別に、驚く事ではない。よくある事がイエスの集団の中においても行われていた、というだけの事である。皮肉っぽく言うなら、この期に及んでも、弟子たちは状況の重大さを認識していない。弟子たちの心の中には、「穢れた霊」がまだ住み着いているのである。

一行はエリコに入る。かなりの群衆が集まって来る。盲目の乞食が、「ダビデの子イエスよ」と呼びかける。多くの人たちが黙らせようとしたが、イエスはむしろ彼を呼んで、目を開けてやる。乞食はイエスに付き従った、と言う。このエピソードも微妙な話で、慎重に受け止めなければならない。「癒し」の件は信用出来ないにしても、最下層の者までがイエスを「メシア」として待望していた、という風に考える事は出来る。そして、これはいかにもイエス的なのだが、最下層の者こそイエスは暖かく受け入れようとするのである。イエスは徹底して、虐げられた者、過ちを犯してしまった者、病に苦しむ者、貧しい者の味方であり続けた。

エルサレム近郊のベタニアに近づく。弟子に2頭の子ろばを調達させる。ろばに乗ってのエルサレム入城は、「メシア」たるべき者のためのイニシエーションであるが、果たして事実として受け止めていいのかは、疑問とせざるを得ない。お話として置こう。夕方になると、エルサレムからベタニアに戻る。この日は、入城パレードだけである。

さて、翌日再びエルサレムへ。神殿でイエスはまことに過激な行動に出る。一種の自殺行為である。イエスを「過激行動派」と呼ばざるを得ないのである。神殿の中で商売している者たちを追い出し始め、両替人や鳩を売る人たちの台や椅子をひっくり返した。商売道具などを担って神殿の中を通る事さえ許さなかった、と言う（11；15 - 16）。つまり、ユダヤ教神殿内でそれまで許容されていた一切の商業的活動を、独自の判断と権威とを以て、禁止することに踏み切ったのである。イエスは、無謀な賭けに出たのである。勝ち目はない。「本来祈りの家であるべきであるのに、お前たちはこの神殿を強盗どもの巢窟にしまったのだ（11；17）」という断罪を突きつける。例えば、信州は長野の善光寺の境内で、土産物やそばや林檎や鳩にや

る豆を商っている人たちに突然商売を止めろ、と強要するようなものである。祭司長たちや律法学者たちが、これを聞いてイエスを亡き者にしようともたまた相談し始めるのも当然と言えよう。イエスは、現実との妥協は一切許さない「原理主義者」である。「神」の方にばかり向いていて、「人」の方を見ようとはしないのである。全ての群衆が、イエスの主張に呆気にとられてびっくり仰天したと言う。それはそうであろう。そして、注目しなければならない事は、以上のような過激行動は、イエス一人でやったのであり、弟子たちは尻込みして参加していない事である。この時点で、弟子たちは、はっきりと師匠の並々ならぬ決意の程を知り、自分たちの見通しの甘さを知るのである。弟子たちには、師匠とともに「自滅」へまで突き進む覚悟は、実は、整っていなかったのである。弟子たちも、この時初めて、心の底から揺さぶられ、びっくり仰天したのである。弟子たちとイエスとの心底の隔たりは、決定的に大きい。夕方になると、又、ベタニアに戻る。

翌朝、再びエルサレムへ入る。神殿内で、祭司長や律法学者が、「何の権威を以てこのような事をするのか」とイエスに問いかける。ヨハネを持ち出して、イエスはうまくはぐらかす。イエスは、「論争の達人」である。イエスは、人々に様々な譬え話で教えを説く。ファリサイ派とヘロデ党も、イエスの言葉尻をつかまえようと、議論を吹っかけるが、イエスの方が上手である。サドカイ派もやって来る。ここで、イエスは、彼の主張を二つに要約してみせる。第一の掟は、「唯一の神を愛すること」、第二の掟は、「お前の隣人をお前自身として愛すること」である。又、イエスは、「メシア」が「ダビデの子」ではあり得ない事を独自の論法で説明している。「メシア」は、ダビデの血を引いていなくとも出現し得る、という事を主張したいのである。「血統」というような古い革袋にとらわれなくともよい、というイエスの「革新性」である。「律法学者たちを警戒せよ (12; 38)」と批判の声を上げる。神殿の崩壊を預言するが、これは弟子たちとのたわいないやりとりの中でふと出て来た言葉で、大した意味はないのであるが、しかし、保守派にとっては、聞き捨てならぬとんでもない「神」を冒瀆する暴言であり、「死」に相当するのであろう。イエスは、殊更に、自分の墓穴を掘っている。

オリーブ山に退き、弟子たちにこの世の終末が来ることを説き、その時の注意を与える。「偽メシア」や「偽預言者」にだまされるな。最後まで苦難に耐え抜く者が救われる。神に選ばれた者のみのために日々が縮められるのだ。苦難の後に、「人の子が力と栄光を伴い、雲に包まれて到来するだろう (13; 26)」と預言してみせる。これは、「メシア」に等しい偉大な「人間」が世直しに出現するであろう、というマルコの御祝儀表現であろう。「人の子」と呼ぶ所は、やはり、「神の子」というようなイメージを避けているのである。イエスにとって、世直しは「神」の意志を体得した志の高い「人間」がするのである。この使命に目覚めた「人間」が自分であってもよいのだが、「メシア」と誤解されようがされまいがどうでもよいのだが、情勢は自分を潰しにかかって来ることを、イエスは明確に認識し覚悟している。イエスは、一粒の種として大地に落ち、やがてたわわなる実が増殖して行くであろう事を信じて疑わないのである。

過越祭の前にイエスを処分したい、と祭司長たちや律法学者たちが共謀している。ベタニアでは、一人の女がイエスに香油を注ぐ。これも御祝儀のエピソードのように感じられる。過越の食事で、弟子の中から裏切る者が一人出ると言い出す。これもお話として聞いて置きたい。

食事の後、オリーブ山に戻る。弟子たちが最後まで自分については来ないだろう、という厳しい予想を述べる。ペトロとのやりとり。皆も健気な決意の程を言い立てる、心にもなく。

ゲッセマネの園で、一夜を過ごす。この園は、マルコの父の所有するものであると言う。イエスの最後の場面は、マルコもごく身近で見学していたのであろう。ここで、イエスは、さすがに眠れず、一心に祈るばかり。覚悟しているとは言え、心は張り裂けそうである。所が、弟子たちは、ひたすら眠るばかり。師匠の心中などを慮る事も出来ない程にひたすら眠いのである。イエスは「孤独な人」である。ユダがやって来る。祭司長や律法学者たちに派遣された人々が剣や棍棒で武装してやって来る。イエスを捕らえようとする。イエスの側に立っていた一人の弟子が、剣で大祭司の下僕の片耳を切り落とす。これはまことに生々しいシーンであり、マルコの実見談であろう。この弟子は、ペトロであったと言う。さもありません、と思われる。しかし、結局、弟子たちは師匠を最後まで守ろうとはせず、全員逃げてしまう。イエスは、完全に「孤独な人」である。ここで、ほんのちょっとしたシーンであるが、まことに印象的な人物の微笑ましい慌てふためきが紹介される。大方は、読み過ごされて、記憶に残らない程のものである。一人の若者が、敷布 (a linen cloth) だけで身を包んでイエスについて来ていたのだが、捕縛隊が捕まえようとして着ていた敷布をひつつかむと、その敷布を捨てて素っ裸で逃げて行った、と言う (14 ; 51)。これは、多分、マルコ自身の自画像であろう、と想像する人もある、と矢内原忠雄氏は言う (『聖書講義I・イエス伝』(全八巻) 第一分冊、岩波書店、1977年12月8日、276頁)。筆者も、この人物をマルコ自身であるという見方に賛成したい。そうでない、と否定する積極的な理由はない。(そうである、と証明出来る積極的な証拠もないが。) 歴史に残る名場面を目の当たりにした証人の一人であることを、如実に示す興味あふれる姿である、と言える。

イエスは、大祭司の屋敷に引き立てられて行く。サンヘドリンと呼ばれる最高法院が、夜になっていたが、イエスの罪状について証言を求めようとする。イエスは沈黙を守っていたが、最後に、大祭司の重ねての問いかけに対して遂に答える。ここの所は、以下に英語版の台詞をそのまま引用してみたい。

Again the High Priest questioned him: 'Are you the Messiah, the Son of the Blessed One?'
Jesus said, 'I am; and you will see the Son of Man seated at the right hand of God and coming with the clouds of heaven.' (*The New English Bible with the Apocrypha*, Oxford University Press & Cambridge University Press, 1970, Mark 14; 61-62, pp. 64-65.)

非常に微妙なやりとりで、一字一句この通りの発言がなされたかどうかは、何とも言えないし、マルコの記憶と判断と感情とが入り込んでいるかもしれない。翻訳者を含めてマルコ以外の人の手さえ入っていることであろう。如上のやりとりで、印象的な点が筆者にとって三つある。第一に、「メシア」であるとイエスが自認していること。第二に、「メシア」を「神の子」と呼ばずに、「祝福されし者の子」としていること。第三に、イエスは、多分、自分のことを指しているであろうと思われるのだが、「人の子」が「神」の右側に座して天の雲に乗ってやって来る、と言っていること。我々後人の頭がちょっとくらくなるのも無理のない所で、かなり気配りのゆきとどいた文言のように聞こえる。第一の点については、遂にイエス自身が「メシア」と呼ばれても仕方ないことと覚悟したのであろう、と受け取ることは出来る。第二、第三では、イエスが自分を「神の子」でない、と宣言しているのと同じことと思われる。「神」のごく近くにいるその御意志を体現しているという自負を示す台詞と受け取りたい。最高法院

全員が、イエスを死に値する、と断罪する。或る者たちが、イエスを殴り、唾をはきかけ、辱めるのであった。そして、ペトロの否みの場面。ペトロにとって、これ以上の何が出来よう。

翌朝、総督ピラトゥスの官邸にイエスは縛られたまま引き立てられて行く。ここでも、総督による尋問が始まる。ここも英語版で以下に引用してみたい。

Pilate asked him, 'Are you the king of the Jews?' He replied, 'The words are yours.' And the chief priests brought many charges against him. Pilate questioned him again: 'Have you nothing to say in your defence? You see how many charges they are bringing against you.' But to Pilate's astonishment, Jesus made no further reply. (*Ibid.*, 15; 2-5, p. 65.)

ここでの問題は、「お前はユダヤ人の王か」という問いに対して、「それはあなたの方が勝手に言っている言葉だ」とイエスが答えていることである。このイエスの答については、実は、「その通りである」としている翻訳もあるのである。ばらつきがこの点に関して見られる。これは重大なポイントである。筆者は、上記のイエスの否定的な返答を受け入れたい。イエスは、自分が「メシア」と呼ばれても仕方ない方向に突っ走り始めていることを認識はしているが、政治的な意味での「ユダヤ人の王」という地位につこうという意志はないのである。この点は、弟子を含めて大衆に十分に理解してもらえなかった所である。イエスの願いはただ一つ、神殿を浄め祈りの場とし、従来の意味のない戒律慣習を破棄し、「神」の御意志に叶うような行いに徹するべく悔い改めることを、ユダヤ人一般に理解し受け入れてもらいたい、ということである。イエスは、ユダヤ教の「宗教改革」を目指していたのである。そのための「指導者」という地位が「メシア」と呼ばれるならばそれは引き受けよう、としていたのである。ローマによるパレスチナ統治を覆そうなどとは考えてもみないことであつたらう。イエスは、「宗教改革者」ではあっても、「ローマへの反乱者」ではない。しかし、もう何を言っても無駄なこととイエスは諦め切っていたのであろう、黙秘を続けるのであつた。ピラトゥスも、ローマへの反逆罪をイエスにかぶせるのは行き過ぎとは感じていても、ユダヤ教指導者層のイエスへの強烈なる反発の前に、なすすべもなく、「ユダヤ国王の僭称者」として断罪せざるを得ない。

エルサレム城外のゴルゴタに連れて行かれ、ローマの兵士たちになぶり者にされながら、十字架刑を受ける。「ユダヤ人の王」という札が打ちつけられていた。罪状は何であれ、イエスはユダヤ教の強固なる教義戒律体制組織慣習の前に弓折れ矢尽きたのである。しかし、このイエスの自滅からユダヤ教とは異なるキリスト教という「新興宗教」が大きな花となって開花し全世界に増殖して行くことになる。この事は、イエスの知る所ではない。午前9時に十字架につけられ、午後3時頃に大声で叫んで息絶える。ここも英語版で引用してみたい。

and at three Jesus cried aloud, 'Eli, Eli, lema sabachthani?', which means, 'My God, my God, why hast thou forsaken me?' (*Ibid.*, 15; 34, p. 66.)

この最後の台詞もまことに微妙なもので、様々な想いを誘発する。まず、「Eli」という呼びかけは「神」でなく「エリヤ」(Elijah)への呼びかけではないか、という見方もある。すぐ後でかたわらにいた人たちが、「エリヤを呼んでいるぞ」と言っている。筆者はこの方を取りたい。そして、この叫びはイエスの人間性の一斑を垣間見せるものとして、何も言わずそのまま素直

に受け取りたい。この英語訳の方は、旧約聖書の『詩篇22』(Psalms 22)の冒頭部分そのままである、ということを知の上で。

イエスの死体は、ヨセフという最高法院議員が引き取り、シーツに包み岩に掘ってあった墓の中に納めた、と言う。二人のマリアという女性が見ていた、と言う。一人は、ヨセの母であるから、イエスの母であるかもしれない。イエスの弟にヨセという人がいる。後は、復活の話になるが、この部分はお話としてしか聞くことが出来ない。

イエスのやろうとしたこと

イエスの言動を辿る過程において、既に述べて来たが、再度まとめてみたい。イエスは一体何をやろうとしたのか。彼は、新しい宗教を創設しようと考えた訳ではない。ユダヤ教の現状を腐敗しきったものと痛感し、「神の王国」を新たに人の心の中に設立しなければならない、つまり、「神」の御心に叶う清らかな無垢の心を持たなければならない、そのためまず悔い改めて、素直に自分の言葉を聞きなさい、というのが彼の意図であった。ユダヤ教の「改革」こそが彼の自己に課した使命であったのである。そのために彼が用意した方程式は、かなり明確に提示されている。以下にユダヤ教の十戒との対比において、イエスの教義を整理してみたい。

(1) 神に関わる戒律

十戒の中で、第一、第二、第三は、神への対し方である。これについて、イエスは異議を唱えてはいない。唯一の神を信ずる、偶像は作らない、主の御名をみだりに唱えない。もっとも、イエスは、「アバ」と神に呼びかけることは度々あったようであるが。

(2) 安息日に関わる戒律

第四条で、安息日を聖なる日として守れ、と十戒にはあるが、これをイエスが徹底的に無視し続けたことは、既に述べたし、イエスの旧ユダヤ教への挑戦であった。

これだけでなく、断食、洗礼などを行わないし、食前に手を洗わないことを容認するし、罪人や徴税人と平気で同席するし、らい病患者にも平気で触るのである。ユダヤ教社会の規律を乱す者と指弾されてもやむを得ないことを敢えてやらかすのである。葡萄酒を入れるに、古い革袋を捨て新しい革袋を用意せよ、と言うのである。

(3) 人間関係に関わる戒律

1) 親子関係について

十戒の第五条には、父と母とを敬え、とある。これにイエスは異論を唱えてはいない。しかし、ふるさとで、母が会いに来た時に、会おうともしなかったことは、既に述べた。イエスにとって、母より「神」の方が大事であるらしい。

2) 夫婦関係について

十戒には、姦淫するな、とあるが、イエスは、更に徹底させている。心の中で思うだけでもいけない、再婚も許されない、と言うのである。しかし、姦淫した女に同情して、女が刑罰を受けるのを救ったことがある。

3) 隣人関係について

十戒の第六、第八、第九、第十は、それぞれ殺人、盗み、偽証、貪婪を禁止している。イエスは、もっと徹底させている。一つの方程式にするとすれば、「隣人を自分のように愛せ」ということである。これが、イエスの教義の核になるべきものであろう。他の

福音書の言葉によれば、更に更に徹底していて、「お前の敵を愛せ（『マタイ』5；44）」ということになり、「右の頬をひっぱたかれたら、もう一方の頬を向けてやれ（同上、5；39）」ということになる。「絶対愛」「絶対平和主義」「徹底的非暴力」「徹底的他愛主義」「徹底的布施」「徹底的自己放棄」ということになろうか。この徹底ぶりは、当時としては、今でもそうであるが、決して穏やかなる主義主張ではない。イエスのイエスたる所以はここにある。イエスは、「過激的絶対平和主義者」にして「過激的他愛主義者」であった。この旗を掲げて、破局へ向かって、最終場面では弟子たちを見捨てて、そして弟子たちに見捨てられて、ただ一人で突っ込んで行ったのである。「愛」という理念の「殉教者」であった。

(4) 「出家」ということ

この言葉は、仏教用語ではあるが、イエスの行動に当てはまるので、使わせていただきたい。イエスは、富者に対して「自分の持っているものを売り払って貧しい者たちに施しなさい。そして、私について来なさい（10；21）」とすすめている。無一物になって出家し、私の教団の一員となり宣教活動に参加せよ、という訳である。ここにおける疑問点は、他の宗教についても言えることだが、この教団の人々は基本的生命維持のための生産活動にあまり励まず、もっぱら乞食（「こつじき」これも仏教用語）に頼って生きているようであることである。「甘え」とは言わないが、「甘い」とは感ぜざるを得ない。マルコの述懐の中にも、他人の畑の麦の穂を食べたり、食物の不足にどう対処するかというような切実な場面が度々出て来る。

イエスはなぜ十字架刑を受けたのか

これも既に述べているように、かっちりと固まって動かしようのないユダヤ教の教義・律法・戒律・慣習・規律を根本から変革しようとしたために、ユダヤ教保守派指導者層の反発を買い「メシアの僭称者」として告発され、ローマの法のもとで「ユダヤ国王の僭称者」として処刑されたのである。その主張行動が、あまりにも「過激」であり過ぎたのである。

イエスは「メシア」であったのか

これについても既に述べているが、明確に「メシア」と自認出来ないが、それに近い立場に敢えて立とうとしているのであるから、人から「メシア」であるか、と問われれば、否定はしにくい、という立場であろう。イエスにしてみれば、そのような呼称はどうでもいいので、ただユダヤ教徒全体が心から「神」の御意志に沿った宗教活動に励んで欲しいだけなのである。そのため、自分の言葉に素直に耳を傾けて欲しいだけなのである。殆ど不可能な夢であったが、政治的軍事的社会改革を目指したのではないのである。

イエスは「神の子」であったのか

イエスは、敢えて「人の子」と自称している。「神」とはあくまで一線を画している。筆者は、「神」「聖霊」「イエス・キリスト」が一体であるという「三位一体説」を肯定することが出来ない。「三位一体説」がイエスの全く関知する所でないことは、勿論である。

イエスはどのような「人間」であったか

これも既に縷々述べて来た所である。イエスは、決して神や仏のように、慈悲深い、心の大きな人ではなかった。自分の言う事を素直に聞こうとしない人々に対しては、すぐに「悪霊」とか「サタン」とかと面罵する。自分の思う通りにならない場所や人々からは遠ざかろうとする。身内や故郷の同輩を疎んじる。「お前の敵を愛せ」という精神に合わないのではないか、などと勘ぐりたくもなる。穢れた病人などに平気で触るし、食事の前に手を洗わないなど、身を清潔に保つ事については無関心である。「不精者」と言ってもいいかもしれない。細かなことに拘泥しない人である。ユダヤ教で決められた戒律なども、納得出来なければ、平気で無視する。よく言えば、「合理主義者」であるが、社会のしきたりの重さについて思いを致さない。悪く言えば、思いつめた「独善家」で、人が何と言おうと自分の目指す所へ突進する。たった一人で、神殿内で商売していた人たちに対して無礼を働いた事など、最もドラマチックに彼の人柄が表れている。「過激派」と呼びたくなる所以である。不用意な発言も少なくないようで、神殿の崩壊の予言などは、言わでもよい事のように思われる。しかし、論争の進め方は上手である。律法学者たちでさえ歯が立たない場面がある。想像力豊かで、譬え話は上手である。弟子たちでさえこの譬え話の真意をつかめないでいる場面がある。「人」のことよりも「神」のことを考える人である。「神の国」の到来のために全てを犠牲にして祈りに徹する事を人々に求めるのである。「原理主義者」と名付けたい所以である。しかし、時折、柔軟な姿勢を見せることがある。全くの「頑迷固陋者」という訳ではない。金持ちには厳しいが、貧者や被差別者や病人や悩んでいる者の徹底した味方である。らい病患者や乞食にまで手を差し伸べる。「無限の愛」を説くのであるが、「汝の敵を愛せ」という立言の中に秘められた「矛盾」には気がつかない。これがどれほど世の中に混乱を生じさせるかに気がつかない（ヒトラーを愛することが出来るか）。「ユダヤ教改革」のために立ち上がり警鐘を鳴らしたけれども、弟子たちを含めて、その笛に心こめて踊る人は皆無であった。弟子たちにも見放されて、ただ一人で自滅への道を進むまことに「孤独な人」であった。「メシア」ならそれらしく堂々たる「メシア」宣言をする方が分かり易かったであろう。「救済者」としての彼の立場がまことに曖昧であったことが、彼の運動にはずみがつかなかった理由であろう。イエスは自分こそ「神」の御心に最も近い人間である、という絶大なる自信を持っていた。彼を「絶対的自信家」と呼びたい。この「自信」は既成のユダヤ教社会体制にすんなり受け入れられる態のものでは、最初からなかった。「自信」が過剰であったために、イエスはユダヤ教社会から抹殺されたのである。イエスの「神」への「絶対的愛」は、勿論、偽りのものではなかった。最期に彼の発した「恨み言」は、「神」をでなく、「預言者エリヤ」を恨むものであった、と考えたい。さて、イエスを一言で括るとすると、「ユダヤ教改革に失敗した男」ということになるだろうか。(1997・11・3)

参考文献

- (1) 『新約聖書・福音書』 佐藤研・小林稔訳、岩波書店、1996・11・22。
- (2) 『聖書・その歴史的事実』 新井智、NHKブックス、1976・4・20。
- (3) 『イエス・キリストの謎と正体』 齋藤忠、日本文芸社、1995・6・25。
- (4) 『聖書I・イエス伝』(全八巻) 第一分冊、矢内原忠雄、岩波書店、1977・12・8。
- (5) 『歴史のイエスを語る』 八木誠一・秋月龍珉、春秋社、1984・2・25。
- (6) 『聖書・これをいかに読むか』 赤司道雄、中公新書、1966・6・25。
- (7) 『教養としてのキリスト教』 村松剛、講談社現代新書、1965・3・16。

- (8) 『旧約新約聖書大事典』 教文館、1989・6・20。
- (9) 『新約聖書』 フランシスコ会聖書研究所訳注、中央出版社、1980・11・1。
- (10) 『聖書・引照つき』 1955年改訳、日本聖書協会、1961。
- (11) 『イエス・キリスト・その歴史的追究』 土井正興、三一新書、1966・12・7。
- (12) *The New English Bible with the Apocrypha*, Standard Edition, Oxford & Cambridge Universities, 1970.

[1997年10月30日 受理]